

難波西鶴と

海ノ道

[34]

森田 雅也

西鶴の『日本永代蔵』
〔元禄元(1688)年刊〕巻四の四「茶の十徳も一度に皆」の福井敦賀の「小橋の利助」は、茶がらを煮出して「えびす茶」として、人々をたまして販売し大もうけしますが、天罰が下ったのか、悲惨な孤独死を遂げます。

さうにその遺体を焼き場に運ぶ途中、春のどかな天氣が一転にわかにかき曇り、大雨とともに雷火が落ち、

利助の遺体を奪っていきます。まさに業の恐ろしさですが、この場にいた人々はおびえにおびえて逃げ惑いします。もはや怪奇話ですね。

利助の財産処分には遠い親戚が集まりますが、この利助の執着がこもる遺産に気持ち悪がり、誰一人、はしり一本さえ取る者がいません。

奉公人たちに分配して取るように指図しますが、彼らも何一つ取らないだけでなく、利

利助の悲劇「敦賀の消長」を象徴

助にもらった、お仕着せを脱ぎ捨てて、皆出て行ってしまいました。喜劇仕立てです。利助の遺した家を買う者がなく、そのまま化け物屋敷とされ、放置されたことを思うと、非常に悲しく、まさしく悲劇と言えるのではないのでしょうか。

西鶴もこの話には珍しく説教を載せません。それは、同じ金もうけをするにもやっつけはない仕事があると例を挙げているのです。計画倒産、詐欺師と組んで持参金付の女房をもらうこと、寺の祠堂銭を借り集めておいて破産すること、ばくち打ちの仲間入り、山師稼業、偽物の朝鮮ニンジン売り、美人局、

大殺し、乳飲み子を育てると一時金をもらいながら餓死させること、瀕死人の髪の毛を抜いて売ることなどで、つまり、一定のモラルある商売をせよというわけです。利助はルール違反の商売人なので天に裁かれたという解釈になります。それではなぜ、敦賀の話なのでしょう。

実は、かつての敦賀は日本海側では一番のお茶の取引港だったのです。それが西回り航路の開発とともにその座を奪われます。敦賀の消長は利助の悲劇に象徴されているのかも知れませんね。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

日本海一の茶の取引港だった敦賀